

文学の文法*

文法形式に着目して文章の理解を深める試み

北 澤 尚

日本語・日本文学**

(2006年8月31日受理)

1. はじめに

かつて、吉本ばななの小説『TUGUMI』(1989)を読んだ時、その冒頭文でいきなり躓いてしまったことがある。

(1) 確かに つぐみは、いやな女の子だった。(下線は引用者による。以下同じ。)

最初から、この文のすわりの悪さ、落ちつきの悪さが気になってしかたがなかった。そこで、「たしかに」についての現行の国語辞書の語釈や文法上の説明を見てみると

- ・事実の裏付けを十分に得てそう判断されることを表す。「 に返事が有った」
(新明解国語辞典第5版からの抜粋)
- ・間違いなく明らか。「 にそう言った」(岩波国語辞典第6版からの抜粋)
- ・「推し量りにおける確からしさを表す副詞」(仁田義雄2000)

といった内容が多く、その他も大同小異である。しかし、ここで(1)の文に関してさらに文法的な見方を深めていくためには、

- ・相手が言った内容や一般的な見解を、正しい可能性があるが一応は認めた上で、それとは異なる意見を述べる場合に使う。例文：「この計画は危険すぎますよ。」「確かに、危険かもしれない。しかし、やってみるだけの価値はあると思う。」(グループ・ジャマシイ編著1998)

という説明の方が、「たしかに」の表現の特性を的確にとらえており、より有効であると思われる。

つまり、この『TUGUMI』という小説では、その冒頭で、本来、先行文脈を必要とする事の多い副詞的成分「たしかに」をいきなり導入することによって、それは文法的規範と破格とがせめぎあっている periphery な領域での冒険的な試みであるが、話し手(ここでは語り手)と聞き手(ここでは読者)とが冒頭部以前から旧知であり、冒頭部の直前まで既につぐみという少女について語り合っていたかのような不思議な表現効果を生みだしているのではないかと考えられる。いわば、この(1)は、次の(1')のように、人格化した語り手が、読者に対して、つぐみという少女のことで、応答しているかのような表現として解釈することができる。

(1') (そうだね。) 確かに つぐみはいやな女の子だった。

なお、次の(2)の文も吉本ばななの『キッチン』(1988年刊)の冒頭文である。

(2) 私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思ふ。

この一文については、主語と述語のねじれた悪文であるとの批判も可能である。つまり、正しくは a. 「私がこの世でいちばん好きな場所は台所である。」か、b. 「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと私は思

* The Grammar of Literature / KITAZAWA Takashi

** 東京学芸大学(184 8501 小金井市貫井北町4 1 1)

う。」でなければならないという説である。しかし、そのような悪文説に対して、加藤典洋(1996)『言語表現法講義』(159頁)は、この文は、下の(2')のように、「うん。」を補って読めばふつうの文になると言う。今私なりにさらに説明を補えば、この文においては、「うん。」を補うことによって、先の(1)と同様、文が対話性を帯び、上記のb.「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと私は思う」の「私は」を省略することを可能にしているのである。

(2') うん。私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。

なお、加藤(同上)は、このように『キッチン』を読みはじめることによって、この小説が「たどたどしい、というより、むしろ新しい声の誕生の場のざわめきをもっていることが感じられる」とも述べている。

以上、わずかな例にすぎないが、ここで言いたいことは、文学作品では破格に思えるような奇異な表現が用いられることがあるが、実は、それらは文法形式の特性を熟知した上での意図的でアクロバットのな使用方法であることが多く、その巧みな表現技法(異化作用)によって読者はある種のスリリングな快感を味わうことができるということである。そして、そのアクロバットのな使用方法を、「文学的」にではなく、より客観的に解説するためには科学的な文法的知識が不可欠であるということをも、吉本ばななの小説の冒頭文に注目して述べてみたのである。

もとより、本稿は、ある特定の文学理論や文章論の枠組みに依拠して、テキストの全体的構造を浮きぼりにしようとするものではない。

むしろ、森山卓郎(2002・2005)が述べるように、「最近の文法研究の方法は、文学作品を文法的に分析して味わうということをも可能にしている」(2002・203頁)ことが本当なら、森山が言うような「文法論的修辭論」というジャンルの開発が可能かもしれず、そのような「文学を文法で味わう」という試みを、にわかにも実践してみたくなったのである。なお、森山自身が実際に取り上げているのは、山村暮鳥、高村光太郎、萩原朔太郎、草野心平、中原中也、谷川俊太郎などの詩や俳句・短歌・Jポップの歌詞が多いので、ここではそれらについては重複を避けて取り扱わず、むしろ、現行の中学校・高等学校の国語教科書に収録されている小説や随筆の類を考察の対象としてみようと思う。

2. 接続表現について(1) 「～なり」はなぜ使われたか

文学作品の表現とひとくちに言っても千差万別である。高度な技法を駆使していることが明白な表現(つまり、これみよがしにレトリックを多用した小説の表現)もあれば、一方、特に指摘がなければ気づかずに看過してしまいそうな、なにげないありきたりに見える表現もある。(本稿ではその両者を区別せずに取り上げている。ただし、この両者は、分析の意義や目標や分析方法などが異なることも予想されるが、その点については今後の課題としたい。)

光村図書の中学校国語教科書『国語1』の米倉斉加年「大人になれなかった弟たちに……」には次の一節がある。なお、この箇所の接続表現を現代語文法研究の立場から考察したものとして、既に山田敏弘(2004・73頁)がある。本稿もその成果から恩恵を受けていることをここに明記しておく。

(3) あまり空襲がひどくなってきたので、母は疎開しようと言いました。それである日、祖母と四歳の妹に留守番を頼んで、母が弟をおんぶして僕と三人で、しんせきのいる田舎へ出かけました。ところが、しんせきの人は、はるばる出かけてきた母と弟と僕を見るなり、うちに食べ物はないと言いました。僕たちは食べ物をもらいに行ったのではなかったのです。引っ越しの相談に行ったのに。母はそれを聞くなり、僕に帰ろうと言って、くるりと後ろを向いて帰りました。そのときの顔を、僕は今でも忘れません。強い顔でした。でも悲しい悲しい顔でした。

この「～なり」が接続助詞か否かについては今は議論しない。それよりも、「～なり」が、「Aなり、B」という構文で、「前文Aの動作が行われるとすぐに後文Bという出来事が起こる」ことを表していることに注目し、さらに、この文脈でなぜ「～なり」が使用されているのかについて考えてみたい。そして、それは「～なり」と類義の関係にある他の文法形式がなぜ使用されなかったのかを考えることでもある。(選ばれたあるひとつの表現の傍らには、選ばれず言表されることのなかった語群が影のように潜在しており、それらの選ばれなかったことの原因を反転させると、選ばれたことの必然性の説明になる。言語学の用語で言えば paradigmatic

relation のことである。)

たとえば、ほぼ同時的な継起 Aノ直後ニBスル を表わす接続表現は、上記の「～なり」のほか、「～(する)やいなや」「～(した)とたん」「～(する)とすぐ(に)」などが挙げられる。

しかし、「～やいなや」はやや古めかしい文体で使用される傾向があり、この作品の語り手である小学校(国民学校)四年生の「僕」の言葉としてはふさわしくないだろう。また、「～とたん」は瞬時にして突然現象や状態変化が生ずることを表し(森田良行1988・801～803頁)、下(4)のような、同一主体の意志的動作用が継起的に行われる場合には用いないという文法的な制限があると考えられ、(3)の「しんせきの人は～」と「母は～」の文では使用できない。

(4) 太郎は家に{帰るとすぐ/帰るなり/*帰ったとたん}, お風呂に入った。

では、次に、(3)の文章では、なぜ「～なり」が選ばれて「～とすぐ」は選ばれなかったのだろうか。これについて、山田敏弘(同上)は「～とすぐ」と「～なり」の違いとして、次の と を取り上げている。

「～とすぐ」は人称にかかわらず使えるが、「～なり」は3人称に限られる。

(5) 僕は帰る{とすぐ/*なり}, 勉強を始めた。

「～とすぐ」は主語が異なってもよいが、「～なり」は必ず同一主語である。

(6) 母はそれを聞く{とすぐ/なり}, 帰ろうと言った。

(7) しんせきの人がそう言う{とすぐ/*なり}, 母は帰ろうと言った。

つまり、この(3)において、三人称者(他者)の行為を専ら表すための「～なり」を使うことによって、「～とすぐ」を使用する以上に、眼前の事態はより冷徹な現実として描き出されることになる。さらに、従属節(前文)と主節(後文)の主語を同一とする「～なり」をくり返し使うことによって、「しんせきの人は……母と弟と僕をみるなり、……と言いました。」「母はそれを聞くなり、……と言って、……帰りました。」という二文の主体とその動作用が明確に対比され、瞬時に起きた極めて緊迫した状況が、鮮やかに表現されることになったのである。

なお(3)のもう一つの下線部「ところが」については、次節で取り上げる。

3. 接続表現について(2) 「ところが」と「しかし」の微妙な関係

(8) 父はおびたしいはがきにきちょうめんな筆で自分あてのあて名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」

と言ってきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

あて名だけ書かれたかさ高なはがきの束をリュックサックに入れ、雑炊用のどんぶりを抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

一週間ほどで、初めてのはがきが着いた。紙いっぱいみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。付き添って行った人の話では、地元婦人会が赤飯やぼた餅を振る舞って歓迎してくださったとかで、かぼちゃの茎まで食べていた東京に比べれば大マルにちがいがなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは、ついに×に変わった。

これは、光村図書の中学校国語教科書『国語2』の、向田邦子「字のないはがき」の一節である。下線部の「ところが」は、「しかし」と置き換えてもほとんど意味は変わらないように思える。しかし、この文章では、「しかし」よりも「ところが」の方がよりふさわしいと感じるのは私だけであろうか。

「しかし」は逆接の接続詞であると一般にはよく言われるが、たとえば、(9)～(11)のように、さまざまな用法で用いられていることがわかる。

(9) 今回は彼も誘いましょう。しかし、次回は二人だけで行きましょう。(対比的な逆接, 対照的な並列)

(10) 太郎は一生懸命働いた。しかし、給料は減っていった。(推論的な逆接)

(11) 小僧は吃驚した。 とこういう風 に書こうと思った。しかしそう書く事は小僧に対し少し惨酷な気がして来た。(意見の追加:「両者の意味関係は『そうなると、その場合は...』に近い。」森田良行1995・250頁) 以上のように「しかし」は、使用範囲が広く多様な用途に応えることができ、一見便利そうである。では「と

ころが」の方はどうであろうか。

(12) 天気予報では今日は雨になると言っていた。ところが、少し曇っただけで、結局は降らなかった。(反予想：前文の内容から当然予想や期待される状況とは食い違う状況が提示される。)

(13) 友人の家に電話をした。ところが、1週間前から海外旅行に行って留守だという。(予想外：前文の内容とは直接矛盾しないが、予想を超える事態が発生する。意外な発見)

このように「ところが」の後文は、話し手の予想や期待に反した事態や予想もしなかったような事態を表す。また、主節は話し手を主語とせず、既定の事実を表す。そのため、文末には事実性が定まっていない、意志・希望・命令・推量の表現などの未確定の事態には使えないという制限もある。(グループ・ジャマシイ編著1998, 市川保子2000, 小池清治・赤羽根義章2002など。)

このように、「ところが」の用法の中心は、前述の「しかし」と違って「反予想・予想外」であり、主文の文末制限も加わって、「ところが」の使用可能な文脈や場面は限られている。しかし、それは逆に言えば、「ところが」を使えば事柄の展開の意外さやそれに対する話し手の驚きの気持ちを聞き手(読者)に効果的に伝えることが可能であるということにもなる。(8)の中の「ところが」を「しかし」に置き換えてしまうと、そのような鋭い表現性は薄れてしまうことになる。

なお、その他に、現代日本語の逆接表現の特徴としてここで紹介しておきたいのは、野矢茂樹(2001)における次の指摘である。

「しかし」の場合、言いたいことは一般的に「しかし」の後にくる。つまり、「A. しかし、B」においてAとBの主張したい度合いは「 $A \leq B$ 」にほかならない。反対に「 $A > B$ 」であるなら、「ただし」を使うべきである。

そのような視点で、光村図書中学校教科書の『国語2』の貫戸朋子「マドゥーの地で」を読むと、この文章には6回「しかし」が使われていることに気づく。

(14) スイスのジュネーブ大学に留学し、心理学の勉強を始めました。しかし、やがてまた、医師の仕事への思いが抑えがたくわき上がってきました。

(15) 一刻も早く、その子を、処置ができる大きな病院に送らなければなりません。しかし、その時刻にはもう夜間外出禁止令が出ていて身動きがとれないのです。

(16) 父親はわたしたち医療スタッフを呼びもせず、娘の死だけを告げ、キャンプを去っていきました。しかし、この出来事には後日談があります。一週間ほどして、診療を待つ人の列を何気なく見ると、その父親が、今度は男の子を抱いて並んでいたのです。

(17) わたしは、「ボランティア」とは無償で尽くすこと、自分のもてる知識や技術、労力を与え、人を助けることだと思っていました。しかし、実際に活動にたずさわるようになって、考えは変わりました。わたしはそこで、必死に生きようとする人々と出会い、彼らから「求められる」ことを通して多くのことを与えられました。わたし自身の喜びと生きがいを見いだしたのです。

以上の(14)~(17)では、「しかし」に後続する内容がより重要であり、「A. しかし、B」のBをめぐって話がさらに核心へと展開していく点も共通している。

(なお、教育出版の中学校教科書『国語3』の渡辺啓子「無医村の優しい人々」にも、偶然であるが、「しかし」が6回使われている。取り上げている内容もよく似ているが、「しかし」を多用しつつ文章がどのように展開していくのか、こちらにも興味がかれる。)

4. 接続表現について(3) 「すると」と「そこで」

接続詞「すると」と「そこで」はどのように使い分けられているのだろうか。それとも、両者は状況があらたに展開していくことを表現する接続詞であって、それ以上の詮索は文章の読解に無用であろうか。すでにこの二つの接続詞をめぐっては、文法・談話研究の立場から、一般に次のような指摘がされている。(主に森田良行(1988), 比毛博(1989), 市川保子(2000)の記述による。)

「すると」は前文で述べられた事態にひき続いて新たな事態が起きる場合に使われやすい。前文は後文の理由とまでは行かないが、きっかけ、契機になることが多い。また、後文の主語は前文の主語と異なる

ことが多い(市川)。「暗い夜道を歩いていた。すると、突然、車のライトが目に入った。」

「そこで」は前の事柄を一段落つけてから、新たにそこから引き起こされた事態を提起するときに用いる。「そこで」は「だから」とは違って、特に前後の文の間に深い「原因 結果」の関係がなくてもよい(森田)。

前文では、主体をとりまく外的な状況や主体の心理的な状態などについて語られる。そうした状況が後文において主体をある意志的な行動へかりたてる。前の文の内容には偶発的な状況から必然的な状況にいたるまで、はばひろく含まれる(比毛)。

「そこで」は前文がきっかけ・契機になる場合は「その時点で」と置換可能であり、前文が原因・理由となる場合は「それで」と置換可能である。「わからなくて困ってしまった。そこで、先生に尋ねた。」

さらに、甲田直美(2001)は、「語り」のテキストにおける「すると」と「そこで」の使い分けを分析し、「すると」は視点人物の意志的動作や情緒的な状態を後文で表現することができないが、「そこで」は、視点人物の意志的動作や情緒の状態とのみ共起し、前文から後文への視点人物の行為や感情の継起を示すと述べている。そして『すると』と『そこで』は共に事象の展開に関する接続詞であるが、主体の連鎖に関して、連続しなければならない『そこで』と、逆に連続を許さない『すると』の用法は対照的である。」という。

なお、「視点人物」とは、物語や小説の登場人物に関する情報や事件やその他の状況を読者に伝えるために、物語の中の特定の人物の知覚を通してそれを描き出すという手法をとることが多いが、そのように設定されている人物のことを指す。

ではここで、高校国語教科書の定番教材である芥川龍之介「羅生門」を資料として、甲田(同上)の仮説を検証してみることにする。本文は新潮文庫本に拠る。

なお、「羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。すると、その荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。……。この門へ持って来て、棄てて行くという習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。」の箇所「すると」「そこで」については、どちらも自己顕示的な語り手が語っている箇所であり、まだこの箇所までには視点人物は作品中に登場していないため、今回の分析対象から除外する。この「視点」に関しては石原千秋(1996)「テキスト論は何を変えるか」から示唆を受けた。

(18) 申の刻下りからふり出した雨は、未だに上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差当り明日の暮しをどうかしようとして、……さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

(19) 下人は、頸をちぢめながら、……門のまわりを見まわした。雨風の患のない、……一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、……気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

(20) 下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、……長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。

(21) 下人は、さっきまで、自分が盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上がった。

(22) 後に残ったのは、唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下ろしながら、少し声を柔げてこう云った。「……」すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。

(23) 下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして……心の中へ入って来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、……、口ごもりながら、こんな事を云った。

以上のように、(18)~(23)には、「すると」と「そこで」が各4例ずつ使われている。そして、視点人物(「羅生門」という作品には、自らを「作者」と名のる自己顕示的な語り手が物語世界の外部に存在しており、実は語り手と視点人物との関係が複雑なのであるが、今回はその点にはふれない)である「下人」の動作の展開については「そこで」が使われ、一方、視点人物の知覚を通して捉えられた「老婆」の動作については「すると」

が使われていることがわかる。なお、(19)の「すると」の後続文は老婆の動作ではない。この例では、視点人物によって知覚された事態が「眼についた」という非意志的な述語によって描き出されている。つまり、「羅生門」の「すると」と「そこで」には次のような使い分けがあることになる。

- ・視点人物自身の意志的な動作の展開 「そこで」(下人)
- ・視点人物による知覚のあり様または知覚された他者の動作 「すると」(老婆)

このように、接続詞「すると」「そこで」と視点人物の動作・知覚との関係に注目して、物語や小説などの文学教材を分析することは、今後さらに試みられてもよいだろう。

5. おわりに

以上、現行の国語教科書の文章の中から、幾つかの接続表現形式を取り上げて、その使用法について考察した。もちろん、現行の国語教科書に限ってみても、析出してみたい文法形式がまだまだ文章のなかにたくさん溶けこんでいるように見える。にもかかわらず、まだそれらについては手つかずのままである。

最後に一言つけくわえておけば、仮に文学作品を対象としてその表現を文法的に解析すると言っても、今回の作業を通して、破格(または前衛的)な表現に文法的な説明を与えることと、さりげない正用の表現まで注視の対象としてその表現の範列的な価値を克明に記述することとは、なにやら似て非なる研究テーマであるように思われる。

前者は作品の文体研究に限りなく接近していきだろうし、後者は、文法形式の解説のために教科書の文や文章がことさらに動員されている印象を与えるかもしれない。

文学テキストという眼前に広がる沃野は、日本語文法研究の視点で捉えれば、未開拓のままと言ってよい。その風景が文法研究者たちの目にどのように映っているのかは分からないが、私自身は今後も試行錯誤をくり返しつつ、文学を文法で味わう 試みを続けてみたいと思っている。かつて「巨視的文法論」という言葉を目にしたことがあるが、そのような言い回しを仮にここで使うなら、本稿で提案したかったのは、むしろ、文章の細部に潜んでいる、文法の「畏」を解明しようとする「微視的文法論」についての一つの試みということになる。

参考文献

- 市川保子(2000)『続・日本語誤用例文小辞典』凡人社
 加藤典洋(1996)『言語表現法講義』岩波書店(岩波テキストボックス)
 小池清治・赤羽根義章(2002)『文法探究法』朝倉書店
 グループ・ジャマシイ編著(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
 甲田直美(2001)『談話・テキストの展開のメカニズム』風間書房
 仁田義雄(2000)「用例を利用する 文法研究の場合」『日本語学』5月号
 野矢茂樹(2001)『論理トレーニング101題』産業図書
 比毛 博(1989)「接続詞の記述的な研究」『ことばの科学2』むぎ書房
 森田良行(1988)『基礎日本語辞典』角川書店
 森山卓郎(2002)『もっと知りたい!日本語 表現を味わうための日本語文法』岩波書店
 (2005)『NHK 日本語なるほど塾 本当はおもしろい文法のはなし』日本放送出版協会
 山田敏弘(2004)『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版

北澤：文学の文法

文学の文法

文法形式に着目して文章の理解を深める試み

The Grammar of Literature

北 澤 尚

KITAZAWA Takashi

日本語・日本文学*

要旨

文学作品における表現の細部を、現代日本語の文法記述の成果を活用しつつ分析することによって、その破格な表現に対して文法的な説明を与えたり、作品中で使用されている文法形式の範列的な価値を明らかにしたりすることが可能である。本稿では、そのような方法論の実践として、現行の国語教科書の文章を取り上げ、特に、文中の接続表現の「～なり」、「ところが」と「しかし」、「すると」と「そこで」などの使用状況について考察し、それらの表現の価値について明らかにした。

キーワード：現代日本語、文法記述、「～なり」、「ところが」、「しかし」、「すると」、「そこで」

* Department of Japanese Linguistics